第一次世界大戦とロシア革命

岩間　徹

一

一九〇六年から一九一一年までロシアの首相だったストルイピンは、「二十五年の平和をあたえよ。そうすればロシアはみちがえるほど変わるだろう」といった。おそらく、ストルイピンは「二十五年の平和」によってロシアにおける改革の道の可能性を所期していたのであろう。これに反して、レーニンは、一九一三年のことだが、ヨーロッパ戦争の到来を待望している。戦争においてのみ革命が勝利する唯一の機会があるとみたからである。かように、ストルイピンは平和を、レーニンは戦争を要望し、また、前者は平和をとおして改革を、後者は戦争をとおして革命を所期した。一見、両者はお互いに異なる発言をしているようであるが、実は、その歴史的展望において、両者ともまったく共通の認識から出発しているように思われる。

カルポヴィッチは、革命前のロシアはその直面したあらゆる問題を漸進的かつ平和的発展の道をとおして解決しうる機会があったこと、ここに両者の歴史認識の共通性を見出している。(Михаил Карпович. Обзор русской истории от начала девятнадцатого века до революции, 1958, стр. 38.) しかしながら、革命前のロシアには、カルポヴィッチのいう漸進的かつ平和的発展の道＝改革の道と対立する急進的かつ暴力的発展の道＝革命の道の可能性も同時に存在したのではなかろうか。これら二つの道の同時的存在にこそ両者の歴史認識の共通性を見出すべきではな

かろうか。

ストルイピンとレーニンという二人のすぐれた同時代人は、それぞれ敵対する政治陣営に属していたが、以上の二つの道の可能性の同時存在を認識していたと思う。ストルイピンは改革の道はもとより革命の道の可能性を認識していたからこそ、平和を要望したのであり、万一戦争がおこれば、かれの所期する改革が中断するかもしれないし、かれのもっとも恐れた革命がおこるかもしれないと考えたのであろう。また、レーニンも革命の道はもとより改革の道の可能性を認識していたからこそ、戦争を待望したのであり、万一平和がつづけば、かれの所期する革命は実現しないかもしれないし、かれのもっとも憎んだブルジョア的改革がおこなわれるかもしれないと考えたのであろう。

ロシアの近代化には二つの段階があったように思われる。第一は守勢的で表面的な段階、第二は積極的でより徹底的な段階である。(Cyril E. Black, The Modernization of Russian Society. *The Transformation of Russian Society*, edited by Cyril E. Black, Cambridge, Mass., 1960, p. 662.) 前者は一七世紀中葉が起点となるし、後者は一八六一年が起点となる。もちろん、一八六一年の農奴解放も積極的な近代化をはじめる意図でおこなわれたのでなく、支配体制の側ではむしろ守勢的な意図がつよかったと思われるのだが、結果的には、表面的でなく、より徹底した近代化の起点となったのである。以上のような意味で、一八六一年を近代化の実質的な起点を考え、一八六一年以来のロシア社会の発展を近代化という社会変革の様式で理解することができる。

ところで、周知のように、いわゆる「近代化論」に対して、我国のロシア史研究の少壮学徒のほとんどは否定的批判を加えている。ただ、ここで一言注意しておきたいことは、近代化論否定の重要なひとつの根拠とおもわれるものが政治姿勢にあるということだ。すなわち、否定論者のいうところをきけば、近代化論者はロシア革命に敵対し、その再発を防止せんとする立場のものだというのである。そのような政治姿勢から革命前のロシア社会の近代化を云々するというのである。しかし、私をしていわしむれば、問題は政治姿勢の如何でなく、歴史事実の正否である。事実の認識における正否の判断が根本であって、それにとって代って、「進歩的」な政治姿勢だの、「反動的」な政治姿勢だのという価値判断が強調されることは真理認識の上で危険だと思う。近代化論に対する批判は事実認識の問題に

しぼる必要がある。近代化論もひとつの仮説にすぎないのであって、近代化論者も、これを絶対不謬の真理と考えているのではないのである。

一八六一年以来のロシア社会の発展は近代化という変革の様式で理解できるといったが、ロシア社会における変革の様式には、前述のように、改革の道と革命の道との可能性が同時に存在していた。カルポヴィッチのように、改革の道のみとりあげて、革命の道をすててしまうわけにはいかないのである。一八六一年以来のロシア社会の近代化には、一面、カルポヴィッチのいう「漸進的平和的な発展の道」によってあらゆる問題を解決しうる機会があったことを事実として認めないわけにはいかない。しかし、他面において、このような平和的な近代化の道をさまたげる要素も厳として存在していたのである。それがミリュコーフのいわゆる「旧体制とその擁護者の自己保存の本能」という否定的要素である。(П. Милюков, История второй русской революции, Sofia, 1921. *The Russian Revolution and Bolshevik Victory. Why and How?* edited by Arthur E. Adams, Boston, 1960, p. 5.) ミリュコーフのいう否定的要素は、言葉を換えていえば、ツァーリ体制の側における専制政治のドグマへの執念であろう。この執念が、一八五八—六一年における、また、一九〇五—六年における政治の近代化＝民主化の可能性の正常な発展を阻止した。革命前夜一九一五年の政治的危機についても同様なことがいえる。しかし他面において一八六一年以来、社会経済の近代化＝工業化が進行しつつあり、政治体制そのものは変わらなかったとはいえ、体制内変革がおこなわれ、この体制内変革が、体制そのものの基礎を掘りくずしつつあった。したがって、専制政治のドグマへの執念という否定的要素が強化すれば、それだけますますロシアの当面する諸問題の漸進的かつ平和的な解決をはばみ、反体制が改革ではなく革命としての、暴力的大変革としての性格をもつに至った。かように一八六一年以来のロシア社会の近代化には、改革と革命という二つの契機が同時に内在していたといえよう。

ストルイピンが恐れ、レーニンが願った戦争が一九一四年に勃発した。この戦争が改革と革命という二つの契機を孕むロシアの近代化にどのように作用したか、実はこれが本論文の根本的テーマである。ところで革命の契機を捨象して改革の契機のみをとりあげる近代化論者には、ややもすればおちいりがちなひとつのおとし穴がある。それは戦

争さえおこらなかったら革命はおこらなかったろうという認識である。果たして戦争それ自体がロシアにおける革命を不可避にしたのであろうか。たしかに戦争によって生み出された軍事的経済的困難は大きかった。その意味で、軍事的危機と資本主義経済の崩壊がますます一般的な経済、社会、政治の危機に転化しつつあって、それが勤労大衆一般の革命化の過程をつよめ、また、はやめたのだ、というリャシチェンコの所説は一面の真理を伝えているが（П. И. Ляшенко. История народного хозяйства СССР. М., 1959.）しかし、国民精神そのものを根底から破壊したあの戦時中の政治危機に対して政府・王朝のよりよき政治指導がおこなわれていたならば、ロシアは軍事的経済的困難をも克服しえたのではあるまいか。その危機に対して責任を負うべきものは、なによりもまず、政府であり、王朝であった。戦争によって生み出された軍事的経済的困難という客観的条件もさることながら、政治指導という主体的条件を無視するわけにはいかない。リャシチェンコ自身、たとえば、大戦中のロシアの燃料危機の問題をとりあげて工業の最大のガンは石炭不足だったというよりもむしろ燃料分配政策だったこと（Ляшенко. op. cit., стр. 637.）、また、食糧危機の問題をとりあげて、その原因は農業生産がおちたことばかりでなく、政府の食糧政策が経済生活の崩壊と完全にむすびついていたこと（Ibid. стр. 640）を指摘している点に注目したい。石炭不足、あるいは食糧危機という客観的条件ばかりでなく、否、それ以上に、政策の貧困という主体的条件を考えなくてはならない。

ところで、一九一五年の夏にはじまった政治危機は、要するに、「中世主義」と「民主主義」との抗争の激化であった。（M. T. Florinsky, Russia. A History and an Interpretation, New York, 1961, Vol. II, p. 1361.）前者は、ツァーリ親政の復活、皇后とラスプーチンとの支配、また官僚組織の腐敗となってあらわれた。後者は、国会（ドウーマ）の能力の向上、ゼムストヴォや市自治体の活動分野の拡大、立法府・経営者・労働者の代表をふくむ戦時工業委員会などの創設による国政の社会的基礎の拡大となってあらわれた。この政治危機は、一面において、改革の可能性を内包していた。ペアズのごときは、おそらく、ロシアでも、当時連合国でやっていたように、国民的また愛国的な連立政府がつくられたのではあるまいか、それのみが、一八六一年以来、しばしば中断しながら進行しつつあった憲法への歩みが実現したのではあるまいか、という「民主主義」への改革の可能性を想定しているのである。（Sir Bernard

Pares, Rasputin and the Empress: Authors of the Russian Collapse. Foreign Affairs, VI, No. 1, October, 1927. *The Russian Revolution and Bolshevik Victory. Why and How?* edited by Arthur E. Adams, Boston, 1960, p. 12.)。しかし、この場合も、改革の可能性をおしつぶしてしまったのは、前述せるミリュコーフのいわゆる「否定的要素」であった。皇帝あての皇后の書簡（The Letters of the Tsaritsa to Tsar, 1914-1916, with an Introduction by Sir Bernard Pares, London, 1923.）は、「否定的要素」、すなわち専制政治のドグマへの執念を語ってくれる貴重な史料である。皇后のテーゼは、ロシアを救わねばならぬ、ロシアを救いうるものはニコライをおいてない、とくにラスプーチンがその道を示してくれる、というまことに簡単なものである。彼女にとって、反政府党の指導者は裏切りもので、国会議員は「でしゃばりの人でなし」であり、国会議長ロジャンコは「縛り首」に値した。国会は解散すべきであり、戦時工業委員会やゼムゴル（ゼムストヴォおよび都市の連合）などは廃止すべきであった。そして、ツァーリ親政を復活すべきであった。最後の手紙（一九一六年十二月十四日）にこうある。「皇帝におなりなさい。ピョートル大帝に、イワン雷帝に、パーヴェル皇帝におなりなさい……リヴォフ〔全露ゼムストヴォ連合の議長〕をシベリアへ送りなさい……ミリュコーフ〔前出。立憲民主党の指導者〕、グチュコフ〔十月党の指導者、中央戦時工業委員会議長〕、またポリワノフ〔将軍。陸軍大臣（一九一五―一六年）〕をシベリアへ送りなさい。いまは戦争をやっているときです。こんなときに国内戦は反逆罪です」。専制主義の怒れる権化として彼女は弱い夫を叱咤激励しているのである。「私たちは神によって帝位につきました。私たちはしっかり帝位を保ち、それを無傷のまま私たちの息子にゆずらねばなりません。」ここにミリュコーフのいう旧体制とその擁護者の自己保存の本能＝否定的要素が遺憾なく示されている。このような「中世主義」の否定的要素の支配からは、暗黒の狂気のみで、理性的な政治指導が生まれてくるはずがなかった。

ここで強調しておきたいのは、以上の「否定的要素」はこの戦争によって気ちがいじみてきたが、しかしこの戦争が生み出したものでないということである。それは過去二世紀にわたるロシア文化史の不変の要素であって、ロシアの近代化の孕む改革の契機の発展を阻止し、革命の契機を解放する役割を果たしてきたもので、それがとうとう一九

一七年に革命という妖怪を舞台の前面にひきずり出してしまったのである。政府・王朝はみずからその墓穴を掘ったといっていいであろう。おしなべて戦争自体が革命の勃発を不可避にしたのではない。ロシア革命の勃発はロシアの歴史に深い根をもっているのである。しかしロシア革命の過程を検討すると、戦争が革命化に果たした作用にもおのずから変化のあることに気がつくのであって、すくなくとも革命生起の段階＝二月革命の勃発においては、戦争の作用の過大評価はつつしまねばならないが、しかし、革命の課題遂行の段階＝二月革命から十月革命への段階においては、戦争が革命化を促進する大きな役割を演じているのである。本論文では、前者の段階について、不十分ながら、とくにドイツの対露革命工作と単独講和工作とをとりあげ、戦争が生み出した外圧の問題に焦点をしぼることにした。ただし、後者、「二月」から「十月」への段階について、本論文でこれまた十分論述する余裕のなかったことは残念である。他日を期したい。

二

第二次世界大戦の結果、ヒトラー・ドイツが崩壊したが、幸いにしてドイツ外務省のアルヒーフのぼう大な記録類が消滅を免れた。これらの記録のなかで、当面の問題に関して興味があるのは、第一次世界大戦の勃発からロシア革命にいたる時期のもので、在外ドイツ大使からウィルヘルムシュトラーセの本省あての報告、本国政府から在外大使あての訓令、また、革命工作員の報告などを含んでいる。(Zeman, Zbynek A, B., editor, Germany and the Revolution in Russia, 1915-1918 : Documents from the Archives of the German Foreign Ministry. Oxford University Press, 1958.)

これらの史料はドイツがロシア革命に賭けていたことを物語っている。つまりドイツ政府はロシアに対する革命工作をおこない、この工作に財的援助をあたえ、スパイとロシア革命家との網を組織し、このネットワークをとおして

ロシアに対する革命工作をコントロールしようとしたのである。ドイツがロシア革命に賭けたのはいうまでもなく大戦に勝利するためだった。事実、一九一四年十一月、ドイツ帝国宰相ベートマン＝ホルヴェークは、英・仏・露の連合の一角をくずさなければ、ドイツの勝利はおぼつかないだろうというペシミスティックな意見を述べているのであって、この意見に対しては、軍の最高指導者の一人、ファルケンハイン将軍も支持しているのである。したがって、対露革命工作は、英・仏・露の連合の一角、ロシアをくずして、ドイツが大戦に勝利をおさめるための戦術戦略の一環だったわけである。そして、開戦当初の五つの中立国、すなわち、スウェーデン、デンマーク、スイス、ルーマニア、トルコにおけるドイツ大使館が中心となって、対露革命工作を開始した。ちなみに、これら中立国に駐在したドイツ大使の顔触れはつぎのとおりである。ストックホルム駐在大使はルキウス（Hellmuth von Lucius）、コペンハーゲン駐在大使はブロックドルフ＝ランツァウ（Ulrich von Brockdorf-Rantzau）、ベルン駐在大使はロンベルク（Gisbert von Romberg）、ブカレスト駐在大使はブッシェ＝ハッデンハウゼン（Bussche-Haddenhousen）、そしてコンスタンティノープル駐在大使はワンゲンハイム（Wangenheim）であった。以上五名の大使はロシアへのあらゆるルートをカバーしていたのであり、また、ウィルヘルムシュトラーセにファイルされたかれらの報告こそ、ドイツの対露革命工作の全貌を知る上に主要な手がかりを提供しているのである。その革命工作は二つの側面をもっていた。第一はコーカサス、ウクライナ、ポーランドおよびフィンランドにおける独立運動を促進することであり、第二はロシアの革命家によってロシア帝国の心臓部で革命をおこすことであった。

ドイツ外務省の記録に顔を出している革命工作員として主なものはパルヴス（Parvus〔A. L. Helphand の偽名〕）やケスキュラ〔A. Keskülа〕などである。パルヴスはロシアのマルクス主義革命家であり、第一次大戦中、ドイツその他でドイツ政府から多額の資金をもらって対露革命工作に従事していた。そのことは一九一五年をつうじてドイツの大使の電報その他を徴して歴々とあきらかである。とくにコペンハーゲン駐在ドイツ大使ランツァウがパルヴスに肩を入れている。（一九一五年八月十四日附、および十二月二十一日附のランツァウの報告。―前掲書『ドイツとロシア革命』四―二頁、八―九頁）。革命工作には多額の資金を要する。パルヴスがランツァウをつうじてベルリンに

要求しているのだが、ロシアで本式に革命をおこすには二千万ルーブル必要だと見積っているのである（一九一五年十二月二十一日附、帝国宰相あてランツァウの報告）。ドイツ政府がすくなくともそのうち若干の資金をパルヴスにあたえたことは事実であって、一九一五年十二月には百万ルーブルを渡したという記録が存在する。一九一五年十二月二十六日附、ドイツ外相ヤーゴウがコペンハーゲン駐在ドイツ大使ランツァウにあてた電報がそれである。なお、ヤーゴウ外相はランツァウ大使ほどパルヴスの計画に全幅の信頼をおいていなかつたようである。それは同電報のなかで、このプランが空想的だという大蔵大臣ヘルフェーリッヒの意見を伝えていることから推察される。

ケスキュラは「エストニア民族委員会」の一員で、エストニア民族の独立解放のために、スイスやスウェーデンで活動していた。このケスキュラが、一九一四年十一月三日附、ストックホルムから出した手紙に、レーニンの名をあげているのであって、おそらく、ドイツ政府がファイルした記録類のなかにレーニンの名が出てくる最初であろう。ケスキュラは、翌一九一五年の春、ベルンでレーニンと会った。多分、これが最初の会合で、三月末のことだろうと推定されている。また五月にも会っている。その年の夏をつうじて、ケスキュラとレーニンとの会合はつづいたようである。ところで、ドイツ外務省のアルヒーフにファイルされたもののなかで興味があるのは、一九一五年九月三十日附、ベルン駐在ドイツ大使ロンベルクから帝国宰相あての報告である（前掲書『ドイツとロシア革命』六～七頁）。「エストニア人ケスキュラはロシアの革命家たちが革命成功のあかつきにわれわれとすすんで講和を締結しようとする場合の諸条件の発見に成功した。著名な革命家レーニンからえた情報によれば、そのプログラムはつぎの諸点を含むものである」。いうまでもなく、ケスキュラがベルンでレーニンと会合してつかんだ情報をロンベルク大使に伝え、大使はまた早速これを本国政府に報告したわけであるが、ロンベルク報告によれば、レーニンの提起した講和条件なるものは以下の七点である。(1) 共和国の設立。(2) 大土地所有の没収。(3) 八時間労働。(4) あらゆる民族の完全自治。(5) フランスについてなんら考慮を払うことなく講和を提議するが、しかしドイツが併合および賠償の一切を放棄することを条件とする。（ケスキュラによれば、無併合、無賠償の条件を出しているものの、ロシアとドイツとの間に諸緩衝国をつくる可能性を排除していないというのである）。(6) ロシア軍隊は即刻トルコを撤退する。

換言すれば、コンスタンティノープルとダーダネルス海峡に対する要求を放棄する。(7) ロシア軍隊はインドに進入する。最後の二点、つまり第六および第七点の趣旨は、ボリシェヴィキは、ドイツに対して近東における行動の自由を認め、また、イギリス帝国に対する攻撃においてドイツの同盟国となるというものであろう。果たしてレーニンが革命によって権力を奪取したあかつきにこれらの条件を忠実に履行する意志が当時すでにあったかどうかは別として、当時積極的にドイツと取引しようとしていたことだけはたしかである。また、ロンベルクもこのレーニンのプログラムに実際上大きな意義を附与していいかどうかについては疑問の余地を残している。しかし、同大使はレーニン一派（ボリシェヴィキ）の革命運動を即刻援助すべきだというケスキュラの意見をドイツ宰相に報告している。

以上の事実はドイツ政府の対露革命工作の一端にすぎない。ドイツ政府がロシアに対してさかんに革命工作をやっていたことは疑いえない事実である。しかし、問題はこの事実をいかに評価するかにあるのであって、私はこれを大きく評価することを二つの理由からさしひかえたいのである。第一はドイツ側の事情、第二はロシア側の事情によって、そう考えざるをえないからである。

第一の理由は、ドイツにおいて、一九一六年夏ごろ、革命工作よりも単独講和工作に切り換えた方がいいという意見が政府部内で定着しはじめたことである。そのことは外務省の記録に微妙に反映している。一九一六年九月から一九一七年三月にいたる間、ドイツ外務省は依然としてロシア情勢についての定期報告を受けとり、また、種々の分離運動、とくにフィンランドやウクライナの分離運動に対する支持を継続しているのであるが、しかし、ドイツ外務省がロシア革命に対する継続的関心を示す唯一の証拠は、社会革命党員ジビン（Zibin）との接触に関するロンベルク大使からの諸報告のみである（その最初の報告は、一九一六年八月二十四日附の報告）。一九一六年夏以来、レーニンとの接触も切れている。ケスキュラはあまり注意を払われていない。また、新聞に対してプロトポーポフとスチュルメルのグループ（ロシアにおける親独派）に言及してはならないという一種の箝口令がしかれている。対露革命工作は下火となりつつあるか、もしくは成行任せとなりつつあったのである。そしてベルリンにおける最高レヴェルでは極秘裡にツァーリとの単独講和交渉計画がはじまったのである。

一九一六年の夏、カイゼルは、宰相ベートマン＝ホルヴェークに対して、非公式の仲介者やユダヤ人をとおして、ロシア皇帝ニコライ二世との接触を試みよという指示をあたえている。ついで、十月三日附の記録は重要であって、この日、ベートマン＝ホルヴェークはカイゼルにロシアとの単独講和交渉に関するひとつの手がかりができたことを報告している。それによれば、ベートマン＝ホルヴェークはスウェーデン外相ワレンベルク（Wallenberg）からロシアとの単独講和をあっせんしようという申し入れをうけたというのであり、また、ワレンベルクはペトログラード駐在スウェーデン大使ブレンドストレーム（Brändström）将軍その他をとおして交渉できるであろうといっているというのである。これと前後して、新聞人、銀行家、商人、政治家、貴族などをつうずる非公式接衝がはじまった。

以上のようにドイツにおける一九一六年夏以来の単独講和工作への転換――もとよりウィルヘルムシュトラーセには革命工作に執心する一派が依然として存在したのであるが――は一体何を意味するかといえば、すくなくとも大戦開始以来二年以上にわたって、ロシア革命という妖怪をたちあがらせようとして、数百万マルクの金を注ぎこんできたにもかかわらず、その革命工作が必ずしも所期の成果をあげうるかどうか覚束ないという見とおしと密着していたと思われる。革命工作はいうまでもなく、ロシアに革命をおこして、ロシアを大戦の戦列から引き離すか、あるいは、それが不可能としても、ロシアを手痛く弱体化するのがねらいであったが、革命工作の成功が覚束ないとすれば、単独講和の可能性をきりひらいた方がいいのではないかと考えるのは当然であろう。そうすれば問題を一挙に解決できるわけである。しかし、革命工作の前途において、ひとたび革命が成就したあかつきに、たとえばレーニンのような革命家が権力を奪取して単独講和を締結するという確たる見とおしがあったわけでないと同様に、単独講和工作の前途においても、果たしてニコライ二世に接近して所期の成果をあげることができるかどうか確たる成算があったわけではないのである。ともあれ、一九一六年夏以来の単独講和工作への転換は、すくなくともそのときまでの革命工作が必ずしもうまくいっていなかった事実を物語るものであろう。

対露革命工作を大きく評価しない第二の理由はロシアの二月革命の個性的な特徴である。まず、ロシアにはフランス革命の第一期の内容をなしていた旧体制を擁護したり反対したりする闘いは存在しなかった。ツァーリの政権は、

ニコライ二世が退位したのち、また、かれが指名した皇位継承者ミハイル大公が憲法制定会議の決定前に皇位につくのを拒絶したのちに、すぐさま降伏した。ロシアの帝政主義者はたちまちにして姿を消し、ツァーリの政権を冒瀆したという理由でたとい口先だけでも抗議した官庁はひとつもなかったのだ。積極的に政治に参与していたすべての政党政派は、保守派でさえも、形式的にも実際的にも、共和主義者となった。それからまた、フランス革命のさいに世論を絶望と恐怖のどん底にまでつきおとしたあの外国人がやってきて旧政権を復活するという危険もロシアには存在しなかった。当時のロシアには外国の皇帝に対して出兵を懇願するという貴族亡命者は存在しなかった。そういう外国干渉の危険は、その後になって、十月革命のさいにあらわれたのだ。「反革命の危険」という言葉は、「反革命」が潜在的に存在していたということを度外におけば、何の根拠もない煽動手段であったにすぎない。二月革命の個性的特徴は、一言でいうならば、ツァーリ支配体制を内外において支持する勢力がまったく存在しなかったことであり、したがってツァーリ支配体制は革命に対してほとんど闘争らしい闘争をすることなく壊滅してしまったということである。このような二月革命の個性的特徴を考慮にいれるならば、ドイツ側の革命工作を過大に評価すること自体が笑止千万ではないか。

二月革命の個性的特徴を以上のようにみてくると、ここでいきおい二月革命の「自然発生性」と「政治指導性」との古典的な論争に言及しないわけにいかない。この問題について多くの議論がある。代表的な論者をあげるならば、チェムバレン（William Henry Chamberlin, The Russian Revolution, 1917–1912, New York, 1935, 2 vols.）とトロツキー（Leon Trotsky, The History of the Russian Revolution, translated by Max Eastman, 1932, 3 vols.）（邦訳、山西英一訳「ロシア革命史」五巻）であろう。チェンバレンは二月革命の勃発においてはいかなる組織的指導もまったく欠いていたことを立証しようとした。この革命は「指導者のいない、自然発生的な、匿名の革命」として最大のもので、一九一六年―一七年の冬のロシアにおけるほとんどすべての思慮深き観察者と雖もロシア帝政の崩壊のようなものを予見したものはいなかったし、また、革命指導者の間でさえ、何人もペトログラードでおこったストライキとパンを求める騒ぎが四日後には守備隊の叛乱となり、政府の転覆となるような事態になろうとは思いも及

ばなかったというのである。自然発生説に対して、トロツキーは、その著「ロシア革命史」のなかで、わざわざ「だれが二月革命を指導したか」という一章を設けて、革命における政治指導を力説している。すなわち、二月革命を指導したのは、大部分がレーニンの党によって教育され、また意識的に訓練された労働者であると、はっきり答えることができると論じているのである。いまここで以上の論争に深入りする余裕はないけれども、一般に、革命という現象を大衆の側からの「自然発生」あるいはエリートの側からの「政治指導」というそれぞれ一面的な観点からのみ把握するのでは革命現象の現実を十分説明できないうらみがある。二月革命の場合もそうである。

チェンバレンは、前述のごとく、同時代人の諸証言に依拠しながら、何人も革命になろうとは夢にも思わなかったと述べているのである（W・H・チェンバレン、前掲書、第一巻、七三頁）。その点、トロツキーも同様な見解を述べているのであって、二月二十三日（ロシア暦）の国際婦人デーがまさか革命の第一日になろうとは、「だれひとり思いおよばなかった」というのである（トロツキー前掲書、邦訳、第一巻、一四五頁）。この革命は、本質において、思いがけずやってきた。不意の革命であった。そういうといかにもおかしいとおもうかもしれないが、疑いもなくそうなのである。この事件の同時代人のほとんどすべてのものがその思い出のなかで同じように証言している。つまり、一方において、だれしも革命を待望し、革命を不可避と考えていたかのようだが、他方において、革命が実際にやってきたとき、だれしも不意をうたれてびっくりしたのである。だれかれもひとしく無準備だった。政府も、反政府諸党も、大衆も、軍隊もそうだったのである。無準備というのは勿論革命が実際にやってきた瞬間において無準備だったというのであって、一般的にいえば、革命家側も政府側も、革命のために、あるいは革命に対して、長期にわたって絶えず準備しつつあったのである。ボリシェヴィキについていえば、一九〇五年以来のかれらの全活動は第二革命への準備以外のなにものでもなかった。また政府の全活動、すくなくともその重大な部分は新しい革命を鎮圧するための準備にほかならなかった。ハバロフを議長とする委員会の計画はそれである。かように双方が準備しつつあったとはいえ、革命到来の瞬間に双方とも不意をつかれたことはあくまで事実である。たとえば、スイスにいたレーニンは革命勃発の報道をチューリッヒの新聞が確認するまで本当とは信じなかったくらいである。

二月革命が、事実、無準備の革命、不意の革命だったとすれば、この革命における計画性の存在は、一応、考えられないであろう。それならば、チェンバレンのように、二月革命における自然発生性を強調することがこの革命の現実を十分説明することになるかというと、問題はそう簡単でないのである。たしかに、チェンバレンの指摘するように、革命の決定的瞬間、また革命の本舞台に、大物指導者は不在だった。その後のボリシェヴィキ革命で名をあげた人々、たとえば、レーニン、トロツキー、ジノヴィエフなどは亡命中であったし、また、スターリン、カーメネフ、ジェルジンスキーなどはシベリア流刑中であった。ボリシェヴィキ以外の革命政党の有名な指導者たちも同じく、二月革命の決定的な時期に、ペトログラードにはいなかった。すでにボリシェヴィキのドゥーマ議員は開戦直後シベリアへ流刑されていたし、また戦時工業委員会のメンシェヴィキ・メムバーは一九一七年の初めに気ちがいじみた内務大臣プロトポーポフによって逮捕された。ロシア国内にはいわば骨と皮ばかりのボリシェヴィキの地下組織があったとはいえ、経験豊かな職業的革命家の欠如、資金の不足、張りめぐらされたスパイ網のために、その活動範囲はせまかった。さらにボリシェヴィキのペトログラード党委員会のメンバーのほとんどは、二月二十六日(ロシア暦)の朝、つまり革命運動の発展において決定的瞬間ともいうべきときに逮捕されてしまった。しかし以上のように大衆蜂起の効果的指導を不可能ならしめた戦時的事情が存在したとはいえ、一般に革命の勃発の場合、エリートの活動を全く無視した大衆の自発的な行動を考えるということは非現実的であろうし、二月革命の場合もその例外ではないのであって、トロツキーの指摘しているように、無名の指導者の存在を無視しえないであろう。ただ、トロツキーは、二月革命を指導したものは、ボリシェヴィキの教育を受けた労働者だとして、ボリシェヴィキの役割をあまりに高く評価しすぎているのは、牽強附会の誹りを免れまい。その点、一九二〇年代にポクロフスキーの監修した「十月革命史論」(Очерки по истории октябрьской революции, под общей редакцией М. Н. Покровского. Том I, Москва, 1927.) 所収の一論文――デ・バエフスキー「帝国主義戦争時代における党」(Д. Баевский, «Партия в годы империалистической войны») のひとつの結論の方が納得できる。論者はつぎのように述べている。「党の労働運動指導は運動の性格と方向とに完全に適していたが、しかし運動の規模には適していなかった。党は軍事危機の結果運動に

入ってきた広汎な大衆を指導下におく状態になかった。党の勢力がほかの中心地とくらべていちばん大きかったペトログラードでさえ、ピーテル（ペトログラードの愛称—岩間註）のプロレタリアートの一連の進出（二月二十三日—二十八日の運動をふくめて）は半ば自然発生的あるいは自然発生的性格をもっていた。運動はボリシェヴィキのスローガン、《Долой царя！ долой войну！》〔ツァーリをたおせ！　戦争をやめろ！〕のもとでおこなわれたので、その意味で専制政治打倒の前夜およびその瞬間における党の指導的役割についていうことが可能だし、またそういう必要がある。」（前掲書、五〇七頁、傍点岩間）。

一般に、革命においては、大衆の現状不満のエネルギーと反体制エリートの政治指導が重要な要素として論ぜられる。しかし、それとともに、支配体制の抵抗力が問題になるだろう。たしかに、二月革命の場合も、大衆——労働者および兵士——の現状不満が爆発して、いわゆる「自然発生的」反乱となった。また、この革命における反体制エリートの政治指導についてもある意味で認められるし、また認めなくてはならぬ。しかし、それと同時に、支配体制の抵抗力が問題で、二月革命の場合、さきにその個性的特徴について述べたところで示唆したように、それが皆無にひとしかったのである。トロツキーは『ロシア革命史』のなかで「五日間」という一章を設けて、二月二十三日から二十八日にかけての革命の動きを才気横溢の筆致で描写しているが、革命に対する支配体制の抵抗力がほとんど皆無だったことについて、「いったい、これは強大なロシア帝国が恐るべき危機に直面して試みたすべてであったろうか？　然り、これがほとんどすべてであった——人民の弾圧に関する素晴らしい経験と、心血を絞った精密周到な計画にもかかわらず。」（邦訳、第一巻、一八六頁）と述べている。「旧制度の全機構が完全に腐朽してしまって、生きた繊維はひとつとして存在しなかったというのが事の真相である」（同書、一八七頁）とも云っている。一九〇五年の革命のときは、ツァーリ体制はまだ抵抗力を残していた。しかしそれから十一年がすぎ、一九一七年には、あの保守的な政治家シューリギンが帝政最後の日に述懐しているように、「……王冠はついにころげ落ちた……悲しげに王冠は花崗岩の舗道にカラカラと鳴る。しかしこの音はもはやだれをも振い起さぬ。もはやだれもあの当時〔十一年前の一九〇五年革命当時〕のように興奮し恐怖して走りよらぬ。」（W. W. Schulgin, “Tage……” Memoiren aus der russis-

chen Revolution. —— Quellen und Aufsätze zur russischen Geschichte, herausgegeben von Karl Stählin, Achter Band, Berlin, 1928, s. 267.）ツァーリ体制は孤立無援のなかに亡び去った。孤立無援の体制に革命に対する抵抗力がありえただろうか。

革命は大衆の現状不満のエネルギー、反体制エリートの政治指導、そして支配体制の抵抗力、以上三者の微妙な力関係を考察しなければならないが、二月革命の場合、従来、「自然発生性」と「政治指導」の問題が大きく問題とされ、ややもすると、支配体制の抵抗力の問題が忘れ去られている傾向があった。あの「五日間」において、抵抗らしい抵抗もしないで、ロシア帝政がまるで腐敗した果実のように揺れ落ちたという事実は覆うべくもない。その抵抗力が皆無に近かったという事実は、トロツキーの指摘するように、ツァーリ体制が骨の髄まで腐り切っていたためであろう。「自然発生的」な大衆運動、また、ある意味における「政治指導」が革命に果たした役割もさることながら、ツァーリ体制が長期にわたって自壊作用をとげつつあった事実をみのがしてはなるまい。以上のような考察に立脚してドイツの対露革命工作の効果をみるならば、その個々の成果はともかく、総体的に大きな評価をあたえるわけにいかないであろう。

三

ところで単独講和工作の効果はどうであろうか。革命前夜のロシアにおいて、宮廷一派に関する種々の流言があって、その流言は、親独主義、それどころか敵国ドイツと直接関係をもっているという非難によって、とくに尖鋭化した。果たして事実なりや否やはひとまずおいて、ラスプーチン、皇后、皇帝がドイツとの単独講和を切望していたという非難は同時代人の諸証言のなかにみられる。ラスプーチンについては、たとえば、ロジャンコがつぎのように断

言している。「予はすくなくともドイツ参謀本部とラスプーチン一味との結託を疑うことができない。」皇后については、たとえばデニーキン将軍がつぎのように証言している。「軍隊では、皇后が単独講和を執拗に要求していることや、キッチナー元帥の事件に関する彼らの裏切り等々について、時とところをえらばず、さかんに論議されていた。皇后はキッチナー元帥の旅行をドイツ軍に通報したと臆測されていた……。こうした事情は帝室と革命に対する軍隊の気分を決定する上に巨大な役割を演じた。」（以上ロジャンコやデニーキンの証言はトロツキーの前掲書の九三―九五頁より引用）。また、皇帝について、トロツキーは、一九一六年の秋に当時国会の代議士だったプロトポーポフがストックホルムでドイツ大使ルキウスと接触のあるワルブルクというものと会見したことについて述べたあと、つぎのように語っている。「プロトポーポフは帰国後ツァーリに彼の旅行と交渉について報告した。ツァーリは単独講和の考えに完全な同感をしめした」（同書、四〇頁）。以上の諸証言にもみられるように、革命前夜、奇妙なトロイカを形成していたラスプーチン、皇后、皇帝が、ドイツとの単独講和を執拗に求めていたという流言はかなり広汎に流布されていたと思われる。

ラスプーチンが戦争に反対していたことは事実である。その点、前首相ウィッテも同様であった。ウィッテによれば、第一に、ロシアはいかなる犠牲を払っても戦争を避けなくてはならぬ。第二に、ロシアはフランスおよびドイツと経済的友好関係をむすび、イギリスの優越に対抗しなければならぬというのである。開戦直後帰国したウィッテは出来るだけ早くこの「馬鹿げた冒険」(M. Paléologue, La Russie des Tsars Pendant la Grande Guerre, 1922, vol. I, p. 121.) をやめるべきだと説いた。いたるところで精力的にその見解を説いて廻ったので、イギリス大使ブキャナンは皇帝に謁見して抗議したくらいである。皇帝もウィッテを昔にまして嫌うようになった。しかしそのウィッテも戦争のさなか、一九一五年三月十五日に急逝してしまった。

ウィッテなきあとも、もう一人てごわい戦争反対者が残っていた。それがラスプーチンであった。かれはあらゆる国民間の、また、あらゆる宗教間の平和を求めていた。大戦勃発の直前、アンナ・ヴィルボヴァあてに電報をうち、「パパ〔皇帝のこと〕に戦争をおこさせないようにしてくれ。なぜなら戦争がおこれば、ロシアとあなた方自身の終り

が来るだろう。そしてあなた方は最後の一人まで失うだろう」と警告した。ニコライ二世はこのメッセージを受けとって腹を立てたとヴィルボヴァが述べている。(Anna Vyrubova, Memories of the Russian Court, 1923, p. 49.) ラスプーチンの娘の証言によれば、かれは皇帝に読ませるためにそのほかにも同様の趣旨の電報数通を送ったという。当時、ラスプーチンはグセヴァという婦人に負わされた傷のためにシベリアに病臥していたのであるが、傷がなおると、一九一四年九月十一日ごろ、ペトログラードに帰り、ウィッテと同様、戦争反対を説いたのである。ウィッテにしても、ラスプーチンにしても、開戦当初の愛国的雰囲気のなかで反戦を説くことは大きな勇気が必要であったと思う。一見奇妙に思われるかも知れないが、ラスプーチンとウィッテとの間には、一種の政治的友情が存在したことはあきらかだ。ラスプーチンは、そのことについて、イリオドールに語り、また、しばしばシマノヴィッチにも語っている。おそらく、イリオドールやシマノヴィッチの証言以上に信憑度の高い証拠は皇帝官房長のモソロフのそれであろう。モソロフは自分の意志に反して、数回ラスプーチンと会う破目になり、ヨーロッパ・ホテル (Hotel d' Europe) においてラスプーチンの酔態を記録しているのだが、このホテルでラスプーチンから「ヴィチャ」〔ウィッテのこと〕と政治的友好関係があることをきかされたのである。ラスプーチンはしばしばウィッテをふたたび権力の座に復帰させたいと語っていたのであって、このことについてはココフツェフはすでに一九一一年の春頃から知っていたし、また、イズヴォリスキーやベレツキーの証言もあるのである。ラスプーチンの見解はみとおしのきいたもので、ウィッテのそれと符合しているのであって、イギリスの外交に対して特別の反感をもっていたのである。ウィッテの方では例のぬけめなさと陰謀好きから、いち早くラスプーチンの政治的重要性を評価し、それを利用しようとしたものであろう。(Bernard Pares, The Fall of the Russian Monarchy, London, 1939, p. 222.) ところで、ラスプーチン、皇后、皇帝に関する前述のような証言は果たして事実的根拠があったのであろうか。

ラスプーチンについては、前述のロジャンコの書物『ラスプーチンの統治』(M. V. Rodzianko, The Reign of Rasputin, 1927.) が極めて重要であるが、その叙述は、往々にして、ずさんで、混乱し、不正確でさえある。ラスプーチン一味がドイツ参謀本部と結託しているという断言もそうで、「いろいろな熱望が関連をもっていて、たがい

に近似しているということは、理論的にみて極めて明瞭であって……」だからドイツ参謀本部とラスプーチン一味との結託は疑う余地なしというのであるが、トロツキーの指摘しているように、ここではたんに「理論的」明白性といっているだけで、この証言のせっかくの断言的語調も大いに力を失っているのである。ラスプーチン一味とドイツ参謀本部との関係については、革命後もその証拠はなにひとつ発見されなかった。詐偽師、高利貸、貴族の売淫夫人ばかりでなく、独探がラスプーチンの周囲にうごめいていたことは、たしかにありそうなことである。しかし、駐露フランス大使パレオローグのいっているようなドイツの金をラスプーチンは必要としなかったであろう。なぜなら彼は最も富めるもの〔ロシアの帝室〕の金庫を自由にしていたからである、というポクロフスキーの指摘は正しいと思う。(M. Pokrowski, Geschichte Russlands, Leipzig, 1929. s. 553.)

ところで皇帝や皇后は単独講和に対してどういう態度をとっていたのだろうか。前述のごとく、トロツキーによれば、プロトポーポフの報告に対して、皇帝は単独講和の考えに「完全な同感」をしめしたというが、このトロツキーの証言は無証拠の宣言といっていいほどで、信憑度が低いといわざるをえない。皇帝や皇后が単独講和への「完全なる同感」を示した確実な証拠はない。皇帝は退位後もそのような考えを抱かなかった。ペアズが皇帝あて皇后の書簡を検討してつぎのように結論していることは注目すべきであろう。「彼女は勝利をはじめから自明の結果とみなした。彼女のおもな不安は、勝利の平和がおこなわれたとき、ロシアの勢力がイギリスの影におおいかくされやしないかということであった。そして彼女のおもな希望はロシアの勝利がまったく彼女の夫の勝利であるべきことであった。……皇后の書簡は彼女の個人的性格に対するあらゆるスキャンダル的な非難を払拭する。またラスプーチンの死まで彼女は熱烈なロシアの愛国者で、ドイツとの単独講和など考えもしなかったことをあきらかにする」(Sir Bernard Pares, Rasputin and the Empress: Authors of the Russian Collapse, *Foreign Affairs*, VI, No. 1 (October, 1928), pp. 153-54.) 戦争中におけるニコライ二世の「祕密外交」に関する書類がひとつも残っていないのは残念であるが、しかし私は公開を予想しなかった皇帝・皇后の往復書簡の史料的価値を高く評価したい。

トロツキーによれば、宮廷は単独講和による救済をもとめざるをえなかったし、しかも情勢が重大化するにしたが

ってますます執拗にこれをもとめたというのである。それは事態のロジックそのものから生まれたのだというのである（トロツキー「ロシア革命史」第一巻、九四頁）。しかし歴史は必ずしもロジックどおりに進行しない。たしかにドイツ側から、あるいはロシア側から、公式または非公式のチャンネルをつうじて、講和へのてさぐりがおこなわれたことは事実であろう。しかしまた、ロシア政府がこれらの動きに対してほとんどまったく積極的な反応を示さなかったことも事実である。前述のように、ウィッテなどは、ドイツとの戦争は致命的なあやまりであり、可及的にすみやかに戦争を終結すべきだと説いたのであるが、そのような見解が政府官辺に受けいれられたという形跡はひとつもないのである。連合国に忠誠だった外相サゾーノフが罷免されて、親独派という噂の高いスチュルメル首相が外相を兼摂していた短日月の間でさえ（一九一六年七月―十一月）、帝政ロシアは連合国への忠誠を裏切るようなよろめきをみせていないのである。スチュルメルについては、いつなんどきドイツと単独講和を締結するかも知れない、という噂が流れていた。フランス大使パレオローグもあきらかにこの噂を信じていたようだ。スチュルメルと会見したときのことだ。新外相の部屋には以前なかった三つの絵がかかっていた。ウィーン会議（一八一四―一五年）、パリ会議（一八五六年）およびベルリン会議（一八七八年）を描いた絵だった。スチュルメルは空白のままになっている第四の場所を指さして、ここはつぎの会議の絵のために空けておくのだ、その会議はモスクワ会議とよばれるだろう、と云った（Paléologue, II, 270.）。パレオローグはスチュルメルのいわゆる「モスクス会議」をドイツとの単独講和締結の会議と勘ぐったのである。イギリス大使ブキャナンは、スチュルメルの人物には感心していないが――この点パレオローグも同様だ――その外交政策については前任者（サゾーノフ）のそれを継承するだろうと外務省へ報告している（Sir. G. Buchanan, My Mission to Russia, 1923, II, 18.）。スチュルメルに関する上述のような噂は文字どおり噂であって、なんら確たる証拠があったわけでない。ルーデンドルフ将軍は、スチュルメルとの接触のごときは皆無だったし、スチュルメルの方からもなんらかの動きを示唆するようなことはまったくなかった、と述べている（G. M. Ludendorff, My War Memoirs, p. 401.）。皇后が戦争に忠実であることをスチュルメルは百も承知だった。パレオローグが勘ぐった「モスクワ会議」も、おそらく、単独講和への示唆でなく、戦勝のあかつきには、モスクワ

で講和会議を開き、みずから議長となる名誉を夢みただけにすぎまい。ブキャナンは、パレオローグとちがって、連合国に忠実な政策が継続されるだろうと推測したのであって、この推測は疑いもなく正しかったのである。スチュルメルとともに、親独派という噂の高かったのは悪名高き内務大臣プロトポーポフであった。それは前述のごとく、嘗て国会議員当時、ストックホルムでワルブルクというものと会見したことがあったからで、ドイツとの単独講和を相談したのではないかという疑惑の眼を向けられたのである。しかし国会議長ロジャンコと国会とからきびしく非難されたとき、プロトポーポフは実はあの機会を利用して、連合国の結束のかたさをドイツ人に納得させてやろうとしたのだと釈明したのである。プロポーポフとワルブルクとのストックホルム会談の真相はよくわからない。ペアズによれば、国会への釈明直後、プロトポーポフはブキャナン大使に紹介してくれと自分に頼んできたと述べている。そしてこの男は連合国の大義を唱道する「ロシアの意志」という新聞を創刊したいという希望を申し入れてきたと述べている（Sir Bernard Pares, The Fall of the Russian Monarchy, London, 1939, p. 379.）。

なお、トロツキーは一九一六年秋のストックホルム会談はドイツとの単独講和のための交渉であったという前提に立って、それはロシアの自由主義者の単独講和への模索だと論断している。自由主義者たちはあいもかわらず親独的傾向のかどで宮廷派に攻撃をかけながら、いまやみずから講和の機会をさぐり、彼ら自身の将来にそなえることが必要だと考えるようになったのだ、というのである。この議論の前提そのものが事実なりや否や疑わしいので、議論全体に問題があることはいうまでもないが、自由主義者がドイツとの単独講和を模索しつつあったという主張それ自体もまた問題であろう。対露革命工作に関する新史料としてしばしば参照したドイツ外務省の記録によると、トロツキーの説明とは異なるロシア自由主義者像が浮かびあがってくる。ベルリンに送られた情報によれば、ロシアで革命がおこったとしても、新政権を担当するものは社会主義者でなく、自由主義者ではあるまいか、自由主義者が政権をとるとすれば、講和どころか、断乎戦争を継続するだろうというのである。そして、以上の報告は、ドイツの対露革命工作に従事していた前出のケスキュラによって、その正当性を確認されているのである。一九一六年九月、ケスキュラはストックホルムで立憲民主党（カデット）の領袖ミリュコーフと会見した報告を寄せているが、それによると、

このロシアの自由主義指導者は反ツァーリストだが、しかし戦争と国土防衛とについては、ツァーリ以上に愛国的でさえあると述べているのである。革命前夜におけるロシアの自由主義者の思考様式には、戦勝をとおして革命へから、革命をとおして戦勝へ、という変化がみられるのであって、その変化をもたらした契機は、おそらく、一九一五年の政治危機であろうと思われるのであるが、そのいずれの思考様式においても、単独講和への模索はまず考えられないところである。トロツキーの説明は、自由主義者の如上の思考様式の変化のなかに単独講和への模索という契機を無理矢理に忍びこませているのであって、うがちすぎた説明といわざるをえないのである。

ドイツの単独講和工作も対露革命工作と同様に第一次世界大戦が生み出した外圧であった。しかし革命前のロシアに対する外圧の作用は、すくなくとも以上の二つの側面に関するかぎり、あまり効果的ではなかった。一般に、ロシア革命生起の段階＝二月革命の勃発については戦争が生み出した外圧は過大に評価できないであろう。

四

二月革命は外圧によって勃発したのではない。ロシア帝政はむしろ自壊したのである。この自壊過程は、おそらく三四半世紀を通じて進行していたとみてよかろう。すなわち一八六一年の農奴解放より一九一七年の二月革命まで、あるいは、一八五五年のクリミア戦争の敗北から一九一四年の第一次世界大戦の勃発まで、ロシア帝政は《Decline》の過程をとったのである（Hugh Seton Watson, The Decline of Imperial Russia, 1855–1914, New York, 1952, p. ix.）。二月革命は、およそ革命一般がそうであるように、民衆の現状不満のエネルギーの自然発生、反体制エリートもしくはサブ・エリートの政治指導、支配体制側の抵抗力、以上三者の微妙なからみあいの現象であったが、とくに、支配体制側の抵抗力の欠如が大きく物を言っているように思われるのである。それはいうまでもなく、長い年月

にわたる帝政の《Decline》過程の所産であったといえよう。

ところで第一次世界大戦という戦時環境をまったく無視してロシア革命を語れないことはいうまでもない。ただ、戦争が大きな意味をもってくるのは、ロシア革命の生起の段階＝二月革命の場合でなく、むしろ、革命が提起した課題をいかに遂行するかという段階、つまり二月革命から十月革命にいたる段階においてであろう。

ロシア革命は平和の問題、土地の問題、少数民族の問題等々の解決をせまられていた。就中、平和の問題は最も重要な問題であった。しかし一般に、戦争を収拾することは戦争を開始することよりも困難である。二月革命後の諸情勢もそれを物語っている。まず、ドイツは事実上ルーデンドルフ独裁のときで、領土征服に意欲を燃やしており、ロシアにただ平和のみをあたえる意志は毛頭なかったであろう。つぎに、英仏連合諸国は勝利を確信していたし、ロシアにドイツとの単独講和を許可するつもりのあろうはずがない。なぜなら、露独講和成立のあかつきには、東部戦線から解放されたドイツ軍が全力をあげて西部戦線に殺到してくることは火をみるよりもあきらかだからだ。最後に、ロシアは敵国に国土を蹂躙・占領されていいはずはないのであって、国土は是非とも防衛しなければならなかったであろう。なぜならドイツ軍の占領によって革命が致命的打撃をこうむる恐れのあることを知っていたからである。以上の諸事情を考慮にいれるならば、二月革命後成立したロシアの臨時政府が、ロシア国民が戦争に倦み疲れているという事実を百も承知の上で、戦争続行を決意した苦衷は理解にかたくないのである。だが、戦争と平和の課題をどのように解決するか、この課題解決をめぐる闘争が「二月」から「十月」への革命の運命を決したといえよう。

戦争を継続して勝利を収め、一九一四年当時よりもロシアの領土や勢力範囲を拡大しようと希望していたのは、臨時政府の支持者のなかで、右派や中央派の若干の人々だけであった。社会革命党やメンシェヴィキは、イデオロギーの上では熱心な平和主義者で、無併合、無賠償の平和をうたっていたが、さて現実に決定をせまられる段になると、六分通り国土防衛を支持するのが常であった。それに対して、レーニンは、周知のように、即時講和を主張していた。かれにとって連合国に対する義務などは意に介する必要がなかった。ツアーリは英仏連合国の政治家どもと取引きした。その英仏の政治家たちは英仏資本家のあやつり人形にすぎない。かれら資本家は南ロシアの冶金工業やコー

カサスの油田を所有し、ドイツやオーストリアの資本家や帝国主義者の犠牲において、その略奪的目的を遂行するために、ロシア人を大砲の餌食にすることを要求した。かれらはその利益の代償として、また、大砲の餌食の代償として、オーストリアやトルコの、あるいはプロイセン領ポーランドの若干の土地をツアーリにあたえる約束をした。スラヴ人の解放とかアルメニア人の解放とかはまったくの眉つばものだ。いまやツァーリは打倒されてしまった。だから、こういう取引は全部破棄さるべきだ、即時講和を締結すべきだ、軍隊はただちに戦線において敵兵と交歓すべきだ、というのである。以上のようなレーニンの主張は、事実上、ドイツに対する一方的降伏を意味する。ロシアの一方的降伏はドイツの帝国主義者ルーデンドルフやドイツ資本家の思う壺であり、いたずらにかれらを喜ばせるだけではないかという反論が当然出てくるであろう。これに対して、レーニンは、いや、ドイツのプロレタリアートがけっ起してウィルヘルム二世やルーデンドルフを打倒するであろうと、ドイツ革命必至の確信をもって答えたのである。レーニンはブレスト・リトフスク単独講和前夜においてもドイツ革命必至の確信を失わなかったようで、レーニンのユートピアンとしての一面が出ているように思うが、しかし、いよいよ講和締結に際して、ドイツとの講和に反対して断乎抗戦を叫んだ同志に向かって、革命家は世界革命というお伽話を信ずるわけにいかないのだといって、単独講和の必要を力説したところは現実的政治家としてのレーニンの面目が躍如としている。

それはさておき、レーニンとボリシェヴィキの活動は積極的な反戦活動であって、このことが「二月」から「十月」への迅速な移行の条件を設定したことは疑いを容れない。二月革命後、臨時政府とソヴィエトという二重権力が存在したが、実は権力は街頭にあったのであり、そこには指導の空白があったのである。誰が指導の空白を埋めるか、これをなしとげたものに権力奪取への道が約束されていたといっていい（岩間徹著『ロシア革命とソ連邦の成立』一四〇頁）。街頭の民衆は平和を願望していた。即時講和が客観情勢から困難であったとはいえ、街頭の民衆の願望に答えることが革命戦術上必要であった。しかも戦時中のレーニンの活動の基本的方式はツァーリズムと帝国主義とに対する闘争であって、二月革命によってツァーリズムが打倒されたいま、帝国主義反対の闘争をめざすことが緊急の課題であった。この課題を積極的に遂行することによって街頭の民衆を動員することが可能となり、ついに十月革命

の成功をみたのである。したがってロシア革命が「二月」から「十月」へすみやかに移行したこと、つまり、ミリュコーフの革命あるいはケレンスキーの革命に終ることなく、レーニンの革命となったことは、ロシア革命の課題遂行の段階において、戦争が十月革命の発条として大きな意味をもっていたことを物語るものである。

因みに、一九一八年十一月のドイツ革命はロシアの二月革命と類似しているが、しかしドイツの「二月」はドイツの「十月」をもたらさなかった。これにはいくつかの要因が考えられよう。そのひとつとして、一九一七年のロシアの情勢と一九一八年のドイツの情勢との相違が国際関係にあったことがあげられるだろう。一九一七年当時ロシアは依然として戦争を継続していた。その年の夏をつうじてレーニンは民衆の平和への願望を利用できた。民衆に平和をあたえられない臨時政府の無能力を利用できた。そして戦線の軍隊はそのまま敵軍と対峙していた。ところが一九一八年のドイツは、帝国宰相マックス・フォン・バーデンが民衆に平和をあたえた。軍隊は戦線から撤退し、動員解除がおこなわれた。そしてドイツは連合国の処理に任された。連合国政府がフランスと隣りあったところにソヴィエト・ドイツの出来るのを黙許するなど到底考えられないことであろう。かように一九一七年のロシアでは戦争の継続が「二月」から「十月」へすみやかな移行を可能にしたひとつの大きな要素であったが、一九一八年のドイツでは戦争の終結がドイツの「二月」をドイツの「十月」たらしめなかったひとつの大きな要素であったのではないかと思う。

（昭和四十年十一月七日、第六十四回史学会大会西洋史部会において、「市民革命の国際環境」という共通テーマのもとに「第一次世界大戦とロシア革命」と題する発表をおこなった。本論文はそれに若干手を入れたものである。）